

韓国の民主化運動とキリスト教（1）

—李承晩時代—

倉 持 和 雄

はじめに

韓国は日本が第二次大戦に敗れた結果、解放を迎えたが、解放直後の混乱を経て、結局、分断国家の片割れの国として独立することになった¹。北の朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）が社会主義を国家理念としていたのに対して、南の大韓民国（以下、韓国）は自由民主主義を理念とした。憲法をはじめとする法制度は、自由民主主義を保障するものであった。しかし民主主義は十全のものではなかった。実際の民主主義は、いわばかたちとして、あるいはお題目として存在するに過ぎなかった。民主主義の要ともいえる基本的人権の保障、自由で平等な選挙とその公正、思想・信条・表現の自由、結社の自由、これらは実際のところかなり制限された。非民主主義的で統制された政治体制、政治学でいうところの権威主義体制が長期間続いたのである。長期間とは、具体的にいうと、1948年8月の韓国政府樹立以来、1987年6月、いわゆる6月民主抗争の勝利による「民主化宣言」までの、あしかけ40年間ともいえるし、あるいは1993年の久しぶりの文民政権金泳三大統領の登場まで引き延ばせば45年ともいえる。1987年の民主化によって大統領直接選挙制が実現はしたが、すぐに韓国の民主主義が十全なものになったのではない。1987年の選挙では全斗煥の後継者である軍人出身の盧泰愚政権が続き、いわば慣性として権威主義的政治運営がその後も見ら

¹ 解放から南北分断に至る過程については拙稿「韓国社会の光と影—韓国社会のひとつの見方—」（『横浜市立大学論叢・社会科学系列』第65巻第1・2・3号合併号、2014年3月）を参照されたい。

れた。このため論者によってはこの時期まで軍事政権だ、との見方もある。しかし、盧泰愚政権中に民主主義は徐々に定着していき、1993年、金泳三政権によって、韓国の民主主義はもはや権威主義体制に逆戻りできない確固としたものとなった²。

捉え方により40年と見るか45年と見るか多少の違いはあるにしろ、韓国の非民主主義的な政治体制が、何故、こんなにも長期間、持続したかといえば、解放後の南北分断体制の出現にその最大の根拠がある。また、その後の南北関係の力関係と状況が非民主主義体制の継続に影響を与えた。すなわちこういうことである。韓国は分断後、韓国を正当な国家として認めない北朝鮮から常にその存立を脅かされ続ける。朝鮮戦争では一時期、韓国は存亡の危機に追いやられた。朝鮮戦争後には北朝鮮工作員の浸透事件や大統領暗殺未遂事件など韓国の政治社会を攪乱させようとする工作があった。このような北朝鮮の脅威を前にして韓国の権力者は北朝鮮に対する安全保障を最優先し、そのためには国民の自由に対する制限もやむを得ないとしたのである。しかしまた国民の多くも北朝鮮からの脅威を現実的なものと受け止め、こうした権力者による民主主義の制限をやむを得ないものと考え、これを受け容れていったのであった。これこそが韓国の権威主義体制＝非民主主義体制が存立する根拠であった³。しかし問題は権力者が民主主義の制限を自らの権力維持のために「北の脅威」を口実に乱用することがあった。自分の政敵を除去したり、反政府運動を弾圧したりするために「北の脅威」を捏造することもたびたびあったのである。

「北の脅威」を現実的なものと受けとめ、ある程度の民主主義の制限をやむを得ないと受け容れていた国民であるが、こうした非合理的な民主主義の

² わたしは盧泰愚政権を韓国民主主義定着までの過渡的性格の政権だと考えている。この点については、前掲拙稿「韓国社会の光と影—韓国社会のひとつの見方—」を参照されたい。

³ 韓国の権威主義体制成立の根拠について前掲拙稿「韓国社会の光と影—韓国社会のひとつの見方—」および拙稿「韓国の1987年における民主化の条件についての考察」（『横浜市立大学論叢・社会科学系列』第62巻第1・2・3号合併号、2011年3月）を参照されたい。

制限に対して黙々と従うのみであったのではない。ときに民主主義の制限を乱用する政府に対して反対の声を挙げ戦いを挑んだ。民主化運動である。権威主義体制下の政権は民主化運動を過酷に弾圧し続けた。民主化運動は、ときの政権による弾圧の強弱や社会状況によって波動的ではあったが、民主化を実現するまで屈することなく続いた。過酷な弾圧が常に伴うだけに、韓国の民主化運動はある意味では命をかけた困難な闘いであった。

さて、この民主化運動に韓国のキリスト教がどう関わってきたのか、本稿はその一端を明らかにしたい。本稿では第一に韓国のキリスト教の民主化運動への関わりの実態を時期的に明らかにし（歴史的事実関係）、第二に韓国の民主化運動におけるキリスト教の関わり意義（民主化運動からの視点）を考察し、第三に韓国のキリスト教において民主化運動への関わりをどう位置づけ、どう評価するのかという問題（キリスト教からの視点）を考察したい。なお第二、第三の課題は、それぞれの時期について、第一の時期的展開過程の叙述と並行して論述していくことにする。このため本稿の章構成は基本的に時期で分けしてある。ところで本稿でいうキリスト教は基本的にプロテスタントを対象としている。カトリックも韓国民主化運動においてたいへん重要な役割を果たしたが、本稿での関心事は韓国のプロテスタントにある。ただ部分的だが必要がある場合、カトリックについても論じるが、その場合はカトリックあるいは天主教（韓国ではこのように表示する）と明示し、キリスト教という場合、プロテスタントをさすことを断っておきたい。

1. 李承晩時代における民主化運動とキリスト教

(1) 李承晩政権とキリスト教

解放直後、38度線以南では新しい国家建設をめぐる混乱に継ぐ混乱が続いた。1945年12月末に明らかにされた米ソ英中四カ国による5年間の信託統治案を契機に左右対立が顕在化した。基本的に左派の信託統治賛成（賛託）対右派の信託統治反対（反託）という構図である。このとき反託運動で先頭に立った右派の指導者の一人が李承晩であった。

李承晩は日本の植民地期、ほとんどを米国で過ごし、そこで抗日運動を続け、解放と共に帰国した保守民族主義者である。解放後のもっとも有力な政治的指導者と目されていた。朝鮮王朝に繋がる血筋の家柄であるとか、米国の名門校プリンストン大学で韓国人最初の博士号取得者であるとか、1919年三一運動後、上海の大韓民国臨時政府で初代国務総理職の推戴を受けるなどといった、輝かしい経歴の持ち主であったからである。彼は若き頃、キリスト教主義の培材学堂に学んだ。このときすぐにキリスト者になったのではないが、のちにキリスト者となる。1896年に設立された独立協会に李承晩は積極的に関わるが、独立協会が大韓帝国政府によって弾圧された際、捕らえられ、獄に入れられた。この獄中で聖書を熱心に読み、キリスト教（教派はメソジスト、韓国では監理教と呼ぶ）の信仰を持つに至ったのである。

李承晩は自らがキリスト者であることを積極的に表明する熱心なキリスト者であった。解放直後の1945年11月、李承晩、金九、金奎植ら、大韓民国臨時政府に関わった三人のキリスト者を歓迎する集会在ソウルの貞洞教会で開催された。ここで李承晩は「萬世の盤石であられるキリストの上にこの国を建てよう」と力説した。また1948年5月、制憲会議の議長となった李承晩は、開会に際し、国会議員であり牧師であった李允榮に祈祷を促した。さらに初代大統領の就任にあたっては職務に最善を尽くすことを「神と同胞の前で」と述べて宣誓した⁴。しかし李承晩はまた強烈な反共主義者であり、封建的な家父長主義の独善者であり、政治権力に執着する権力亡者でもあった。この彼の性格が李承晩政権の反共的性格と独裁的性格の長期政権を生み出した一つの大きな原因である。

しかし、李承晩のキリスト教に対する明確な信仰表明は、解放後の朝鮮半島におけるキリスト教とキリスト者に影響を与えることになった。植民地時代に苦難を味わった朝鮮半島のキリスト者は、このように明確に信仰を表明する

⁴ 韓国基督教歴史研究所編『韓国キリスト教の歴史Ⅲ 解放以後20世紀末まで』（韓国基督教歴史研究所、2009年）の第10章「解放と新しい出発」[韓国語]、41ページ。

李承晩に対して無条件の支持を与えてしまうことになった。とくに 38 度線の北から南にやって来た（これを越南と呼ぶ）キリスト者はそうであった。38 度線の北においては、ソ連が占領して共産化が着々と進行し、その過程で植民地時代にも劣らないキリスト教弾圧がはじまった。そもそも植民地時代における朝鮮半島のキリスト教は平壤を中心とする平安道がもっとも盛んであった⁵。平壤は「東洋のエルサレム」と呼ばれるほどであった。解放後、この朝鮮半島のもっともキリスト教が盛んであった西北地域からキリスト者が共産主義の弾圧を逃れて大挙、南にやって来たのである。この多数の越南キリスト者の存在がその後、韓国におけるキリスト教の教勢に寄与したことはいうまでもない。彼らは解放直後から韓国樹立後の韓国キリスト教のマジョリティとなって韓国キリスト教に影響を与えた。越南キリスト者は共産化が進む北で過酷な弾圧を受けてきたので多くは反共主義者であったし、一部は過激な反共主義者であった。彼らはキリスト者であり、強烈な反共主義者である李承晩と共鳴することになった。越南キリスト者の青年達は西北青年会（西青）に代表されるような右翼青年団体を組織して李承晩を全面的に支持し、南における左右対立のなかで左翼の暴力的鎮圧の前面に立ったのである⁶。

信託統治案を実現するための米ソ共同委員会が左右対立のために結局破綻し（1947 年 9 月）、米国は朝鮮独立問題の解決を国連に提訴した。国連総会は国連監視下での総選挙案を採択したが（1947 年 11 月）、ソ連の拒否で南だけの選挙案が浮上した（1948 年 2 月）。いわゆる単独選挙案である。単独

⁵ 日本の植民統治末期においては朝鮮半島のキリスト者はこの西北地域に約 60% が居住していた（カン・インチョル「韓国改新教反共主義の形成と再生産」[韓国語]、『歴史批評』70 号、2005 年 2 月、72 ページ）。なお韓国におけるキリスト教の歴史の概観については拙稿「韓国キリスト教の歴史と特質についての考察」（『横浜市立大学論叢・人文科学系列』第 58 巻第 1・2 号、2007 年 3 月）を参照されたい。

⁶ 例えば、1946 年 10 月大邱人民抗争としてはじまった左派による抗争、1947 年 3 月済州島における三一発砲に抗議するゼネスト、さらに 1948 年 4 月以降の済州島における四三武装蜂起などの鎮圧活動において西青团員が動員された。この実態については崔泰陸『南北分断と 6・25 戦争時期（1945-1953）民間人集団犠牲性と韓国キリスト教の関係研究』（モグオン大学校大学院神学科博士学位論文、2014 年 12 月）[韓国語] が詳しい。

選挙の実施は南だけの単独政府樹立、すなわち南北分断をもたらすことは明らかであった。こうしたなかで信託統治案には李承晩と共に反対してきた金九は単独選挙案に反対の声を挙げた。金九は解放時、大韓民国臨時政府主席であり、中国において抗日独立運動を指揮してきたため李承晩と並び解放後の有力な政治的リーダーの一人であった。

一方、李承晩は単独選挙案を全面的に支持した。そもそも彼はすでに早い時期から南だけでの政府樹立を主張していたから当然だともいえる⁷。しかしここにおいて反託運動でほぼ一致していた保守・右翼陣営も単独選挙をめぐって対立することになった。これに左翼の単独選挙反対が加わり、南の政局は混乱の度を増した⁸。しかし米軍政は1948年5月10日の単独選挙を強行した。選挙後、制憲会議を経て1948年8月15日に大韓民国が樹立されたのである。そして李承晩が初代大統領に就任し、李承晩政権が成立した。ほぼひと月後の1948年9月9日、北には金日成を首相とする朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が樹立された。朝鮮半島に二つの国家、しかもイデオロギー的に相対立する二つの国家が成立したのである。

この南北分断体制の下で李承晩政権は何よりも北と対決するために反共主義を最優先した。すでに韓国樹立に至る過程で左派を弾圧し続けていたため、確固とした共産主義者のなかには北に逃避する者もあった。一方、前述したように北からは共産化の過程で弾圧された人々が多数、越南してきていた。彼らの多くは反共主義者であった。そのなかにこれもすでに述べたようにキリスト者が多く含まれていた。こうして韓国社会は解放直後と比較すると李承晩政権がはじまった時期、すでに反共主義が優勢な状況になってい

⁷ 1946年6月3日、李承晩は全羅北道井邑において南だけでの政府樹立の必要性を主張した（朝鮮史研究会編『朝鮮の歴史〔新版〕』、三省堂、1995年、313ページ）。

⁸ 左翼の単独選挙反対の実力闘争として1948年4月3日の済州島における南労党（南朝鮮労働党）の武装蜂起がある。これについては拙稿「済州島4・3紀行—現場探訪によって4・3事件を考える—（上）（下）」（『横浜市立大学論叢・人文科学系列』第64巻第3号および第65巻第1号、2013年3月および2013年12月）を参照されたい。

た。この状況をさらに決定的にしたのが朝鮮戦争であった。

朝鮮戦争は南北分断体制を武力で解決しようとした北の南侵ではじまった。1950年6月25日のことである。軍事力で劣勢であった韓国は2カ月余りで朝鮮半島南東部のごく一部を残すまでに追いつめられてしまった。李承晩政府は釜山に避難し、さらには済州島に避難する計画を立てるほどに危機的な状態におかれた。ソウルはもちろん朝鮮半島の中部、南西部は北朝鮮軍の支配下に置かれた。このとき北朝鮮軍の占領下で韓国の人々は共産主義に同調するかしないかという選択をめぐって極限的な状況に置かれた。明確な反共主義者は北朝鮮軍の手で処断された。処断された人々のなかにはキリスト者も多数含まれていた。人々は共産主義の恐怖を目の当たりにした。ところが仁川上陸作戦（1950年9月15日）のあと、戦局が反転し、これまで北朝鮮軍によって占領された地域が修復されると、今度は韓国軍や警察、右翼によって北の占領期、北に同調した人々に対する粛清がはじまった。朝鮮戦争後の韓国社会の性格を決定づける上で、韓国人にとってはこの体験の方が強力な影響を与えたかもしれない。すなわち韓国社会にとどまろうとする限り、反共の旗幟を鮮明にしなければならない、そうしなければ生存すらも脅かされるということを学んだのである。その結果、朝鮮戦争後の韓国社会は反北＝反共は何らかの批判や疑問を差し挟む余地のない思想的に硬直化した社会となったのである。

こうした社会状況は李承晩政権の長期化を助けることになった。人々が強力な反共主義者李承晩のリーダーシップを支持したからである。そして李承晩はこうした社会状況を巧みに政権維持に利用した。彼は政治的ライバルをはじめ自分に反対する者を「共産主義者」に仕立てあげ、彼らの政治生命を抹殺した。ある場合には政治生命のみならず、ほんものの生命をも奪った⁹。この時代、「빨갱이」（パルゲンギ、韓国語で「赤」の意）＝「共産主義者」という語はまさに殺し文句であった。相手をいったん共産主義者だと規定して

⁹ 1954年の大統領選挙で対立候補となり、善戦した曹奉岩をスパイ捏造事件で死刑に追いやった事件（1959年）がその代表的な例である。

しまえば、相手の反論を封じることができるのである。こうした手法で李承晩は反対勢力を萎縮させたのである。1952年、自分に有利な直選制の改憲のため反対する国会議員を共産主義者だとして連行、拘束したり、暴漢を使って襲ったりした。これは民主主義とかけ離れた暴力政治としか言いようがない。

1954年李承晩は永久執権を図って「初代大統領に限り重制限をなくす」とする改憲案をめぐって奇想天外な論法で可決を強行した。可決するには国会の在籍議員数203名のうち3分2以上の賛成、すなわち136票が必要なのだが、賛成票は135票で1票足りなかった。しかし、203の3分の2は135.3333だから四捨五入すれば135票でよいとする論法で可決を強行した。韓国では「四捨五入改憲」と呼ばれる事態である。まさに李承晩政権の民主主義がかたちだけの民主主義でしかないことを如実に物語る象徴的な事件といえる。

さてこうした非民主主義的な李承晩政権に対して韓国のキリスト教は批判の声を挙げるどころか、むしろ彼を支持し、応援したのである。彼がキリスト者であり、キリスト教を積極的に支援したからでもある。その代表的な例は韓国軍における従軍牧師制度の導入である。キリスト教界は米軍と同じように韓国軍にも従軍牧師を配属するよう要望したが、李承晩はこれを受け入れた。徴兵制によってほぼすべての若者が軍隊に行くが、キリスト教界は多数の若者にキリスト教伝道のまたどない機会を与えられたのである¹⁰。こうしてキリスト教界は1952年の大統領選挙以来、李承晩支持を訴え続けていくのである¹¹。

¹⁰ 韓国軍における従軍牧師制度の導入については、前掲、韓国基督教歴史研究所編『韓国キリスト教の歴史Ⅲ 解放以後20世紀末まで』（韓国基督教歴史研究所、2009年）の第11章「戦後の宗教状況」〔韓国語〕、74～76ページを参照せよ。

¹¹ 1952年7月、翌月の選挙を控え、韓国基督教連合会は基督教選挙対策委員会を組織して全国の教会を通じて李承晩への投票を呼びかけた。韓国基督教連合会の李承晩および与党副大統領に対する選挙支援は1954年および1960年の選挙においても基本的に続けられた。これについては前掲、韓国基督教歴史研究所編『韓国キリスト教の歴史Ⅲ 解放以後20世紀末まで』（韓国基督教歴史研究所、2009年）の第11章「戦後の宗教状況」〔韓国語〕、76～79ページを参照せよ。

(2) 4・19 学生革命とキリスト教¹²

1960年3月15日、李承晩にとっては四選目の選挙が行われた。李承晩は野党民主党の大統領候補趙炳玉が選挙戦途中で病死したので勝利は確実であった。しかしこのときの選挙で与党自由党の至上課題は、副大統領候補李起鵬を勝たせることにあった。というのも前回、1954年の正副大統領選挙において副大統領は野党候補張勉に敗れてしまったからである。このため露骨な選挙違反が繰り返された¹³。

このあからさまな不正選挙に高校生や大学生が立ち上がった。選挙前の2月28日、この日は日曜日であったが、大邱における野党副大統領候補張勉の遊説に学生たちが参加するのを妨害するため登校を強制する措置をとったのがきっかけである。こうして高校生達を中心に公明選挙を要求する学生デモがはじまった。3月10日の選挙当日、馬山では不正選挙を糾弾し、選挙無効を叫ぶ学生・市民のデモが起こった。これを鎮圧しようとした警察はデモ隊に発砲し、死者が発生した。さらにこの混乱で行方不明になっていた高校生金朱烈の死体が催涙弾を頭に受けた姿で約1ヶ月後の4月11日、馬山湾で発見された。これがその後の全国的な学生デモの起爆剤となった。

4月18日、ソウルで高麗大生が市街デモを繰り返したが、彼らに対して暴力輩や右翼青年団体が襲撃して多数の負傷者を出した。このことを伝え聞いたソウル市内の大学生・高校生が翌4月19日、大挙して景武臺（大統領官邸）に向けて「再選挙要求」「独裁政権打倒」を叫んでデモを開始した。警察隊の発砲によって多数の死者を出し、さらに李承晩政権は戒厳令を発して鎮圧しようとした。しかし4月25日、学生達の犠牲を無にするなど立ち

¹² 4・19 学生革命の経緯についてとくに注記しない場合、金ジョンナム『4・19 革命』（民主化運動記念事業会、2004年）[韓国語]、民主化運動記念事業会編『韓国民主化運動史1 第1共和国から第3共和国まで』（トルベグ、2008年）[韓国語]を参考にした。

¹³ 国立4・19 民主墓地管理所のパンフレットによれば、①4割事前投票および投票箱の取り替え、②有権者名簿の操作及び代理投票、③投票数の操作及び三人組、五人組公開投票、④野党参観人の追い出し、⑤自由党腕章隊とやくざを動員しての有権者威嚇などの不正な方法がとられたという。

上がった大学教授達のデモによってついに李承晩は退陣を決意せざるを得なくなった。学生たちのこの決起がときの政権を打倒したのである。4・19 学生革命と呼ばれる所以である。

4・19 学生革命は多くのキリスト者にとって青天の霹靂であった。この点について、1970 年代、1980 年代に、たびたび迫害を受けながらも韓国民主化運動をリードした朴炯圭牧師は以下のように回想している。

私はそのときまで、社会全般の不条理や不正腐敗などにはほとんど関心のないまま、平凡な牧会活動を楽しんでいた。ところが1960年4月19日、歴史的な日を迎えることになった。その日は我が国の歴史においても重要な日であるが、私の人生においても忘れることの出来ない日である。多くの若者が熱い血を流した4・19革命を現場で目撃したことによって、自分の考えが大きく変わったからである。4・19の日、私は景武台（現青瓦台）近くの宮井洞にある大きな食堂で結婚式の司式をしていた。教会員の息子の晴れやかな結婚式であった。司式を終えてから教会の女性信徒たちと一緒に外に出ると、銃声が続けざまに聞こえてきた。不思議に思って銃声のする方へ近づいてみると、景武台に向かった学生たちが銃撃を受けてどっと出てきていた。銃弾にあたって倒れ、血を流している学生もいた。

私は大きな衝撃を受けた。学生たちを助けなければと叫び、彼らがいる所に飛んで行こうとしたが、教会員が私を捕まえて放さないで、隊列の中に入って行くことはできなかった。担架に乗せられた学生たちが血を流しているのを見たとき、頭を強く叩きつけられるような感じがした。血を流す学生たちに、十字架上で血を流しているイエスの姿を見た。神の怒りが注ぐような強烈な感じであった。（朴炯圭『路上の信仰 韓国民主化闘争を闘った一牧師の回想』新教出版社、2012年、88～89ページ）

やや長い引用をしたが、朴炯圭牧師にとって4・19学生革命は彼のキリ

スト教信仰を根本的に反省する契機になったのである。この引用箇所を少し後で彼はこのように決意する。「私は4・19革命で受けた衝撃の中で何日かを過ごした。そして、私自身が見かけ倒しの牧師であったことを繰り返し反省し、真の牧師になろうと決心した。」¹⁴

もう一人のキリスト者の回想記をやはり引用しよう。池明観氏である。朴正熙政権以降、やはり民主化運動に寄与したキリスト者の一人である。いまや周知のことになったが池明観氏は日本にやってくるまで1973～1988年まで岩波書店の総合雑誌『世界』誌上にT・K生の筆名で「韓国からの通信」を書きつづけた。彼はこれを通じて韓国の非民主主義的な政治体制を告発し、民主化運動の実情を発信しつづけることによって韓国の民主化運動を背後から支えた。この池明観氏は4・19学生革命のときのことをこう書いている。

4・19革命の前夜、私はひとりで李承晩を支持していたといえるかもしれない。政局があれほど騒々しいのに、どうして私はそのように保守的または反動的でありえたのであろうか。弁明がましくなるが、北にいた時共産政権が台頭しては、南の李承晩に対して毎日悪しげに攻撃していた。私はそれに抵抗して南下したのだから、南の権力に対してはやはり無条件の支持を与えていたのであろう。

このことはその後の私の政治的姿勢とは大きく対照をなすといえよう。李承晩政権が倒れて、特に1961年から軍事政権が現れると、私はそれに強く抵抗しはじめるからである。李承晩以後、1960年の4・19以来、私は政治権力に対して厳しくなってきた。特に軍部独裁政権に対しては。

アカデミズムとでもいおうか、それに固執しようとした姿勢を、私は間もなく振り捨ててしまった。そしてジャーナリズムをできる限り利用しながら、権力を敵に回して闘うようになってきたといえるかもしれない

¹⁴ 朴炯圭『路上の信仰 韓国民主化闘争を闘った一牧師の回想』（新教出版社、2012年）、92ページ。

い。私の姿勢のこのような転換が1960年の4・19革命の衝撃によって引き起こされたと思っている。(池明観『池明観自伝 境界線を超える旅』岩波書店、2005年、79～80ページ)

のちに民主化運動に献身する二人のキリスト者の証言から分かるように、4・19学生革命が彼らにとって衝撃であり、彼らの政治的姿勢を大きく転換する契機になったということである。逆にいえば、それまで李承晩政権に対して否定的な思いをほとんど抱いていなかったことが分かる。それはこの二人に限ったことではない。キリスト者のほとんどすべてがそのような状態であったように思われる。積極的に李承晩を支持する活動をしなかったとしてもこの時期、大多数のキリスト者は無言のうちに李承晩政権を支持し続けたのである。

それゆえ、韓国樹立後、最初の民主化運動といえる4・19学生革命に韓国キリスト教は何らの寄与をすることはなかったといつてよい。もちろん4・19学生革命を担った学生たちのなかにキリスト者の学生が含まれていた¹⁵。しかし少なくともキリスト教界は組織的にこの民主化運動を支援することはなかったし、否、4・19革命直前まで、4・19革命の直接的なきっかけとなる3・15不正選挙においてさえ李承晩を積極的に支持していたのである。ある意味でキリスト教界はこの不正選挙に加担する側だったのである。

(3) 考察

本稿は「はじめに」で述べたように、①韓国の民主化運動におけるキリス

¹⁵ 京東教会の姜元龍牧師によれば、4月18日の高麗大学の学生デモを主導した学生の朴サンウォン、4月19日の国会議事堂前デモを主導したソウル大学生会委員長尹シク、幹事長の尹ヨンイル、彼らはすべて京東教会の学生たちであったという(チョウ・ピョンホ『韓国キリスト青年学生運動100年史散策』[韓国語]地に書かれた文字、2005年、77ページ)。キリスト学生たちの一部には李承晩政権の非民主性に対する批判が生じていたことが分かる。ただこの一事をもって4・19にキリスト教が積極的に寄与したと評価することは難しい。ただもう少しこのときの学生運動内のキリスト学生の役割を実証的に検討して議論することは必要だと思われる。

ト教の関わりの意義（民主化運動からの視点）と、②韓国のキリスト教において民主化運動への関わりをどう位置づけ、どう評価するのか（キリスト教からの視点）という二つを考察の課題として提起した。しかし李承晩時代の民主化運動である4・19学生革命にキリスト教はほぼ何らの関わりを持たなかった。それ故、本章においては別のかたちで考察の課題を取り上げようと思う。一つは、この時期の韓国のキリスト教界とキリスト者がどうして李承晩政権を支持し続けたのか、李承晩政権が非民主的な性格を強めていったにもかかわらず、それを黙認し続けたのかという問題である。そしてもう一つは、この時期、そうした政治的姿勢をとり続けた韓国キリスト教の性格と特徴をどのようなものとしてとらえたらよいかという問題である。

第一に、李承晩時代のキリスト教が李承晩政権を支持し続けた理由についてである。すでに本論において述べてきたことからこの点は容易に理解できるだろうと思うが、ここで少し整理しておきたい。ひとことでいえば、この時期、韓国キリスト教界は李承晩政権をほとんどキリスト教政権であるかのように受け止め、全面的に支持を与えたといえる。そのような受け止め方をしたのは、李承晩自身が熱心なキリスト者であり、キリスト教界に対して積極的な支援を与えるなど好意的であったことが何よりも作用していた¹⁶。これに加えて、以下の二つの韓国キリスト者の体験がその感覚をさらに強めることとなった。一つは解放直前、日本の植民地末期に日本から受けた迫害の体験であり、もう一つは解放直後、38度線以北で北が共産化する過程で受けた迫害の体験である。

¹⁶ このことはこんにち韓国の保守的キリスト者の中で李承晩をきわめて肯定的に受け止める理由として依然として根強く作用しているといえる。例えば、最近、youtubeを通じて講演の動画をアップロードしている李ホ牧師は、李承晩がキリスト者として韓国のキリスト教発展に貢献したことを強調している。同時に李ホ牧師は李承晩による大韓民国建国があったからこそこんにちの韓国の民主主義と経済発展があったとする、ニューライトの立場からの史観も披瀝している。ニューライトの史観については拙稿「韓国における歴史教科書論争：教科書フォーラムによる歴史教科書批判—その立論と民主化運動関連記述の考察」（『横浜国立大学論叢・人文科学系列』第61巻第3号、2010年）を参照されたい。

日本の植民地時代、キリスト教は基本的に総督府から厄介視された。それはキリスト教会が民族独立運動の温床とみなされたからである。実際、1919年の拳民族的な抗日独立運動であった三一独立運動においてキリスト者は主導的な役割を担った。独立宣言書に署名した民族代表者33名のうち16名がキリスト者であったし、三一独立運動が燎原の火の如く拡大していった時に地域によってはキリスト者が先導的役割を果たした¹⁷。このため総督府はキリスト教界に警戒の目を向けざるを得なかった。しかしだからといってキリスト教の活動を露骨に妨害することは1920年代まではできなかった。朝鮮半島にキリスト教宣教師を派遣している西欧列強諸国との関係があったからである。ところが1930年代以降、とくに日中戦争から戦争の時代に入っていくと、年々、西欧列強諸国との関係は悪化してくる。こうして日本は西欧列強との良好な外交関係を維持するためにキリスト教に配慮する必要性はほとんどなくなったのである。しだいに朝鮮半島のキリスト教に露骨な干渉をしていくようになる。

干渉のポイントはこうである。皇国臣民化に従順である限りキリスト教会の存続を許す、そうでなければ断固たる処置をとるというものである。そして皇国臣民化に従順であることの証しとして神社参拝を要求していった。最

¹⁷ 三一独立運動におけるキリスト教の関与については澤正彦『未完 朝鮮キリスト教史』（日本基督教団出版局、1991年）を参照されたい。この書は三一独立運動自体の研究としても非常に優れた研究である。総督府の裁判資料等を利用し、三一独立運動指導者のうちキリスト者に焦点を当てて彼等がどのようにしてこの運動に関わったのかを実証的に考察している。また地方史資料を利用して各地の三一独立運動でキリスト者がどれほど主導的役割を果たしたか実証的に検証している。周知のように三一独立運動はキリスト教と共に天道教が大きな役割を果たしているが、澤正彦の研究では結論として運動準備段階では、天道教が主導して、これにいくつかのキリスト教グループが結合したとみている。その後の運動の拡大については、総督府資料を分析して、キリスト教主導といえるのはキリスト教の盛んであった平安道・黄海道で、時期的にも三月初旬に限ってであり、その他の地域や時期でキリスト教主導を言うのは困難だとしている。ただ、さらに個別の地方史に当たるとき、全般的にいてキリスト教主導の事例は多くあり、入監者中キリスト教徒の比率は22.5%でキリスト教徒の人口比率と照らしてキリスト者の三一独立運動における参加の高さ、役割の大きさを過小評価できないと述べている。

初はキリスト教主義学校の学生たちの集団参拝の要求にはじまり、最後は教団・教会が公式に神社参拝を認め、行うことを要求したのである。これを拒否して廃校となったキリスト教主義学校もあった。最後まで拒否して不敬罪や治安維持法違反で捕らえられ、獄苦を味わった牧師や信徒もあった。なかには獄死＝殉教した牧師・信徒もいた。しかし結局、組織としてのキリスト教はこれに屈してしまった。国家神道は宗教ではなく、神社参拝は偶像崇拜でない、国民儀礼だと合理化して従ったのである。そして皇国臣民として従順であることを示すために積極的に日本の戦争遂行に協力していったのである¹⁸。こうして戦時下、解放直前の朝鮮半島のキリスト教は存続することができた。解放後のキリスト教はまさにそのような経験をしたキリスト教であった。最後まで神社参拝に抵抗した者は迫害され、獄中で苦難を受けた。屈服してしまった者、彼らは肉体的な苦難を受けなかったかもしれない。しかし信仰的・精神的に個人としても教団としても大きなしこりを残すことになった。韓国のすべてのキリスト者が苦難を受けたといつてよい。

もう一つ、解放直後の北におけるキリスト者迫害の経験についてである。日本の敗戦直前、ソ連は対日参戦して一気に満州、朝鮮半島北部に侵攻してきた。これに対して米国が38度線による南北分割占領案を提起し、これをソ連が受け容れることで38度線以北はソ連の占領下におかれることになっ

¹⁸ 植民地末期、キリスト教に対する神社参拝の強制の過程、これに屈服してしまったキリスト教のその後の実態についてはさしあたり金承泰「日帝強占期韓国キリスト教」(金興洙・徐正敏編『韓国キリスト教史探求』、大韓基督教書会、2011年) [韓国語] および韓国基督教歴史学会編『韓国キリスト教の歴史Ⅱ』(基督教文社、2014年)の第9章「日帝の迫害とキリスト教の闘争(1936～1945)」 [韓国語] を参照されたい。なお前掲、潭正彦『未完 朝鮮キリスト教史』も具体的な事柄について詳しい。またこれをもとにして整理した前掲、拙稿「韓国キリスト教の歴史と特質についての考察」も参照されたい。拙稿のなかで触れたが、朝鮮半島のキリスト教界が神社参拝を受け容れるために日本のキリスト教界が説得する役割を果たしたという事実を忘れてはならない。日本のキリスト教界が韓国のキリスト教界に負わねばならない罪責の一つである。日本基督教団が1967年に「第二次世界大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(戦責告白)を出すのが、それは日韓国交正常化後、日韓キリスト教会の交流を開始するにあたってなさねばならない前提であったと考えられる。

た。38度線は当初、米ソが日本軍の武装解除のための分割占領案に過ぎなかった。しかしこれが結局、南北分断の出発点になったのである。ソ連の占領下ですぐにキリスト教が迫害されたわけではなかった。当初、北における代表的な民族主義であり、キリスト者である曹晩植は重用された。しかしソ連の後ろ盾で登場した金日成がしだいに権力を掌握し、北における共産化が着々と進められていく過程で曹晩植が排斥されるのはもとよりキリスト教会、キリスト者は圧迫を受けていくようになる。

西北地方といわれる平安南北道はすでに述べたようにキリスト教の勢力が強い地域であった。植民地時代の朝鮮におけるキリスト教の中心地域であった。彼らはこの地域の政治的、経済的な有力者でもあった。それだけに共産主義勢力はこの地域で彼らの勢力を殺ぐためにとりわけ弾圧を強めていった。これに対してキリスト教側も共産主義化に対する反対運動を展開していくが共産主義側はこれを暴力的に鎮圧した¹⁹。植民地支配からの解放によってこれまでのような宗教弾圧からも解放されるとの希望を抱いた北のキリスト者は、共産主義者によって再び、日本による弾圧にすぐることも劣らない弾圧を受けて絶望するほかなかった。結局、彼らの多くはキリスト教信仰を守るために、すべてを捨てて38度線の南へと逃れていった。植民地時代にはキリスト者が日本の迫害から逃れようとするれば遠く海外にまで逃げねばならなかった。しかし解放後のいま、38度線さえ越えればキリスト者にとって北とはまったく違う別世界があったからである。こうして北のキリスト者は

¹⁹ 解放後の38度線以北における共産主義によるキリスト教弾圧については澤正彦『南北朝鮮キリスト教史論』（日本基督教団出版局、1982年）を参照されたい。このなかから一つ例を紹介しよう。1946年3月1日、解放後、最初の三一独立運動を記念する礼拝をキリスト教会が独自に開催しようとしたが、北朝鮮臨時人民委員会は自らが主催する集会に参加することを要求した。これを拒否するや事前に多数の教職者が逮捕され、また当日、キリスト教会側が記念礼拝をしている最中、説教者の黄殷均牧師を赤衛隊が講壇から引きずり下ろすといった事件が起こった。信徒たちは抗議して市街デモを敢行し、教会で断食祈祷に入ったが、深夜に武装した赤衛隊は黄殷均牧師や信徒たちを連行した（平壤章台岷教会事件）。北も「信教の自由」を謳っていたが、それは内面的信仰、教会内での宗教儀式に限るものであって教会外での伝道や宣教活動を許すものではなかった。

続々と越南したのである²⁰。

以上にみてきたような解放直前の植民地下の苦難や解放直後の北での苦難と対比したとき、キリスト者にとって李承晩政権時代の環境は大袈裟にいえば「地上の天国」、キリスト教国の到来とも受け止められたのである。これまで抑圧された信仰を自由に表明できるばかりか、その布教・伝道をまったく自由にできるうえ、これを李承晩政権は支援してくれたからである。もちろん李承晩政権時代を客観的にみれば決して「地上の天国」などということとはできない。左右勢力の激しい対立による社会的混乱があったし、経済的にもまだまだ貧しかった。そして何よりも朝鮮戦争という悲劇の時代でもあったからである。それにもかかわらず、この時代、キリスト者はこれまでに経験したことのなかったような恵まれ、かつ有利な社会的環境が与えられた²¹。それはキリスト者李承晩がそのように保障してくれたからだ、キリスト者たちは考えたのである。李承晩をこのように受け容れたキリスト者たちにとって李承晩の過ちは過ちとさえ認識できないものであったのだと考えられる。彼らは護教者李承晩をこうして全面的に支持したのである。

つづいて第二の問題、すなわち、この時期の韓国キリスト教はどのような性格と特徴を持つものとしてとらえたらよいかという問題について考察していきたい。最初にいえることは、上で述べたとおりにこの時期のキリスト教が政治権力に迎合的であったということである。むしろ癒着していたといってもよいかもしれない。なぜそうなったかは、繰り返しになるから述べる必要はないであろう。一つ興味深いことは、韓国キリスト教がこの時期に分裂を繰り返かえしていったのだが、いずれの教派もときの政権、すなわち李承晩

²⁰ 1945～1953年まで北から越南したキリスト者は北にいたキリスト者の35～40%に達するという（金明培『韓国キリスト教社会運動史 民主化運動と人権運動を中心として1960-1987』[韓国語]、ブック코리아、2009年、57ページ）。

²¹ 一例を挙げれば、初代国会議員208名中キリスト者は44名（約21%）、第一共和国時代（1948～1960年）政府の19部署の長官・次官242名のうち38%がキリスト者であった（前掲、韓国基督教歴史研究所編『韓国キリスト教の歴史Ⅲ 解放以後20世紀末まで』、42ページ）。これはキリスト者の人口比率が5%に満たなかった当時であってきわめて高い比率であった。

政権に対するスタンスで違いはなかった。この教派分裂についてごく簡単に韓国教会の最大教派である長老派（イエス教長老会）に即して述べるとこうなる²²。

最初の分裂の争点は植民地末期における神社参拝をめぐる起こった。神社参拝を最後まで拒否した牧師、信徒、この人々を「出獄聖徒」と呼んでいるが、彼らは神社参拝に屈した牧師達を批判した。しかし批判者側は少数であり、神社参拝に屈した牧師達は多数派であって依然として教団の教権を握っていた。結局、批判派は教団から追い出されるかたちで1952年に新しい教団（高神派長老会—彼らが創設した高麗神学校に由来する）をつくることになった。続く分裂は神学論争をめぐる起こった。イエス教長老会の神学校であった朝鮮神学校の教授金在俊の神学が自由主義的だとの批判がきっかけであった。保守的神学が優勢であったイエス教長老会総会は別途、長老会神学校を設立し、金在俊を免職にした。しかし金在俊を支持するグループは、1953年、のちに韓国基督教長老会（略称、基長）となる新教団を立ち上げた。以上、二つの少数グループをいわば排除したイエス教長老会の最大の分裂は1959年、李承晩政権崩壊直前の年に起こった。争点はWCC（世界キリスト教教会協議会）への加盟問題であった。世界の諸教会との紐帯を追求しようとする加盟推進派とWCCに共産諸国の教会も加盟していて容共的な組織だと批判する加盟反対派とで対立したが、結局、前者はイエス教長老会統合側、後者はイエス教長老会合同側として分裂したのである。

1960年代以降、韓国キリスト教の民主化運動はじめ社会運動への関与においては教派により違いが明確になっていく。もっとも積極的なのが韓国基督教長老会（基長）であり、これにつづいたのが基長も含むWCC加盟の韓国基督教教会協議会（NCCK）に属する諸教派（イエス教長老会統合側、基

²² 解放後の韓国キリスト教の教派分裂については多くの文献があるが、ここではヨン・ギョホン「韓国教会の分裂」(前掲、金興洙・徐正敏編『韓国キリスト教史探求』) [韓国語] を挙げておく。なお前掲、拙稿「韓国キリスト教の歴史と特質についての考察」にもごく簡単に言及している。

督教大韓監理会、韓国基督教長老会、救世軍大韓本営、大韓聖公会、大韓福音基督教会)であった。つまり李承晩政権後に政治的志向において分化していった韓国キリスト教の諸教派が李承晩時代には李承晩政権支持で相違がなかったということなのである。

韓国キリスト教の分裂の争点となった神社参拝問題、自由主義神学問題、WCC加盟問題、これらに李承晩政権は関与することはなかった²³。李承晩もその政権も各教派の内部政治に立ち入ることはなかった。李承晩自身は基督教大韓監理会(メソジスト)の信徒だが、キリスト教全般の布教拡大を支援することはあっても自分の属する教派にとくに固執するということではなかった。教派分裂にもかかわらず、すべての教派が李承晩支持において差がなかったのはこうした李承晩の姿勢が関係しているとも考えられる。

さて二番目にこの時期の韓国キリスト教の性格として指摘できる点は反共的性格である。キリスト教が本来的に反共的だとはいえない。キリスト教の教理には共産主義思想と共鳴する部分がある。実際、植民地時代に民族主義キリスト者で共産主義に傾いていく者もいた²⁴。韓国キリスト教が反共的になったのはこの時期の南北分断という歴史的状況に規定されている。このことはすでに述べた本論の記述からある程度納得できるであろう。共産化していった北は植民地期にキリスト教のもっとも勢力のあった地域である。ここ

²³ 李承晩は朝鮮戦争の休戦問題で休戦を米国政府に働きかける WCC と対立することがあった(これについては、尹ジョンラン『韓国戦争とキリスト教』(ハヌル、2015年)の第3章「李承晩の WCC 攻撃と KNCC」[韓国語]を参照)。しかし韓国キリスト教の諸教派の WCC 加盟問題について何らかの干渉した形跡は見られない。

²⁴ これについては前掲、澤正彦『南北キリスト教史論』第一部第三章が参考になる。ただ澤正彦はキリスト者の李東輝、呂運亨などが共産主義グループと連携したのはあくまでも抗日民族運動のためであって彼らが真正の共産主義者とはいえないとしている。また前掲、澤正彦『未完 朝鮮キリスト教史』には付論「金昌俊牧師について」という論考がある。金昌俊は三一独立運動のときに民族代表者の一人として独立宣言書に署名したキリスト教牧師であるが、彼は解放後、自らの意思で北に渡り、最高人民会議の副議長、祖国統一民主主義戦線中央委員会初代書記長となった人物である。澤のこの論考は金昌俊が書いた論考を考察して彼の神学、思想を検討したいへん興味深い。ともかくキリスト者の思想がまったく共産主義思想と相容れないとはいえない事例である。

でキリスト教は共産主義によって迫害を受けた。そして北のキリスト者の多くが越南したのである。当然、北での迫害の経験は越南キリスト者を反共主義者にした。そしてこの越南キリスト者は韓国のキリスト教界で優勢を占め、発言力を増したのである。このことがまた反共主義キリスト者李承晩を全面的に支持していくことと結びついた。

反共主義は同時に親米主義と結びついた。韓国のキリスト者は米国がキリスト教国であると考えたからほぼ無条件に親米的になった。また解放後、米国のキリスト教界が韓国のキリスト教界を経済的に支援してくれたからでもある。米国が反共主義の国であるから親米・反共は同義語といってよいかもしれないが、まったく一致していたわけでないことは注意する必要がある。あくまでも重視したのは反共であった。より具体的には反北であった。朝鮮戦争中に休戦問題で李承晩政権が米国政府と対立したとき韓国キリスト教界は米国政府の政策に反対し北進統一を叫ぶ李承晩の休戦反対を支持したのである²⁵。まさに反共＝反北という点で韓国キリスト教は李承晩と一体化していた。

この時期、韓国キリスト教の反共的性格はきわめて硬直的であった。すでに「反共主義」という言葉を使っているが、たんに反共的というのにとどまらない強固な「主義」であった。共産主義を絶対悪とみなした。そして共産主義者はキリスト教的な用語を用いるならば、悪魔＝サタンであった。こうした性格を持った韓国キリスト教は、共産主義者を悪魔＝サタン視することでその殲滅＝殺戮も神の義として肯定した。朝鮮戦争の渦中にはもちろんだが、李承晩政権の時代にそのような殺戮が盛んに行われたのである。キリスト者自身もこの殺戮に加担した。実に悲劇であるのは、明確に反共主義者でなければ、すなわち明らかに自分の味方の側でなければ、共産主義者または共産主義に加担する者とみなして排撃し、無実な者まで犠牲者にしたという

²⁵ この点については、前掲、尹ジョンラン『韓国戦争とキリスト教』の第3章「李承晩の WCC 攻撃と KNCC」[韓国語]を参照されたい。

ことである²⁶。反共主義でなければ共産主義、味方でなければ敵、中間的な存在を許容しないこの硬直的な二元論的思考がこの時期、韓国キリスト教をも支配していたのである。

このように韓国のキリスト教がたんに反共的だということにとどまらず反共主義を公然と言い表す背景として植民地期末期、神社参拝に屈服し、その後、日本の戦争に協力した、いわゆる親日行為をきちんと清算できなかったことが関係している。すでに述べたように「出獄聖徒」を擁した高神派長老会を除けば、それ以外の長老会ははじめ他のキリスト教教派は結局、日本の圧力に屈服してしまっていた。それが彼らにとって信仰的・精神的に大きなしこりとして残ったということをすでに述べた²⁷。この罪責を突かれることは彼らの大きな弱みであった。しかし多数派を占めていた彼らは組織としてこの罪責を真正面から受け止めなかった。むしろ少数派の高神派を駆逐したのである。そうした彼らにとって反共主義は、神社参拝という過去の罪責をそのままにして彼らに存在意義を与えてくれるものであった²⁸。米軍政も李承晩政権も植民地期の罪責を問わなかった。反共であることを最優先していた

²⁶ これについては前掲、崔泰陸『南北分断と6・25戦争時期(1945-1953)民間人集団犠牲と韓国キリスト教関係研究』が多数の具体的事例を紹介してくれている。また拙稿「済州島4・3紀行(下)」(『横浜市立大学論叢人文科学系列』第65巻第1号、2013年)で済州島4・3事件のなかで行われた西北青年会(以北出身の右翼青年団体がキリスト教が関係している)の虐殺事件について考察している。

²⁷ 韓国の指導的な牧師の一人である韓景職牧師(越南キリスト者であり、解放後急成長した永楽教会牧師)は1992年、宗教者のノーベル賞ともいわれるテンブルトン賞を受賞するに際して自らが神社参拝に屈服した罪責をはじめて告白した(崔ドクソン『韓国教会親日派伝統』、本文と現場の間、2000年、Iの3「テンブルトン賞受賞者の良心宣言」[韓国語])。このときになって彼が罪責告白したことについてはいろいろ論評があるが、このことは神社参拝が後々まで韓国キリスト者の心のしこりになっていることを示すものといえる。半世紀を経てではあったが、韓景職がこのように真摯に罪責告白したことは評価できることだと考える。

²⁸ 韓国キリスト教の神社参拝問題の清算の不徹底と反共主義との関係については、前掲、カン・インチョル「韓国改新教反共主義の形成と再生産」[韓国語]から示唆を受けた。ここでカン・インチョルは「神社参拝のトラウマが共産主義という信仰的悪魔を発明するようになることで巨大な‘信仰的共通感覚’を形成するようになった」(76ページ)と述べている。

からである²⁹。李承晩政権崩壊後、ここまで硬直化した韓国キリスト教は変化していくのだが、しかしその後の時期においても反共的性格の基調を維持し続けていくのである。

キーワード

韓国、民主化運動、キリスト教、権威主義体制、李承晩政権、4・19 学生革命、政権癒着、反共主義

²⁹ 李承晩政権初期に少壯議員らの要求で「反民族行為処罰法」が成立し、親日反民族行為の清算が取り組まれた。しかし李承晩は反共を優先し、また自らの権力を支える警察権力（ここに植民地時代、日本警察官が多数含まれており、彼らは抗日民族運動家を弾圧したまさに親日反民族行為者たちであった）を擁護するためにこの取り組みを中断させてしまったのである。